

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<研究ノート>秩父困民党幹部の袴の着用

著者	河本 由生
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	54
ページ	71-83
発行年	2000-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/10703

〈研究ノート〉

秩父困民党幹部の袴の着用

河 本 由 生

はじめに

秩父事件当時、埼玉県本署の警部であった鎌田冲太が、事件後に著した『秩父暴動実記』という記録がある。ここには、事件参加者の装いを、

暴徒ノ扮装ハ農人普通ノ時服、乃チ筒袖引草鞋ニシテ、更ニ暴徒一般ノ目標タル白鉢巻白襷ナリシ。小隊長及相当ノ位置ニアル者ハ紋付ノ羽織袴ニ大小刀ヲ佩ビタリ。総理ノ如キハ羽織ハ黒斜子ノ紋付ニテ袴ハ仙合平ノ類ナリ、大小刀ヲ佩ビ黒ノ高帽ヲ冠リ雪駄又ハ麻裏ヲ履キ、

と描写し、その装いを「恰モ維新時代ノ諸藩士ノ如シ」と評価している。

鎌田は秩父事件当時、国事掛となっており、秩父事件の起った明治一七年には探偵として何回も来秩している。事件以後は明治一九年に埼玉県本署の審査部長、浦和警察署長を経て、同年九月から明治二三年まで秩父郡長として在任している。その後、自分

秩父困民党幹部の袴の着用（河本）

自身の体験と職務上収集し得た資料を元にして「秩父暴動始末寛書草稿」を明治三六年に著している。その草稿にあたるのが前出の「秩父暴動実記」である。

では、埼玉県内で昇進していく鎌田は根っからの埼玉県人かというところではない。

鎌田は薩摩藩出身の士族であり、戊辰戦争の際には薩摩大砲隊伍長として京都御所乾御門警備、北陸道先鋒軍を勤めて戦功を挙げている。『秩父暴動実記』中の「維新時代ノ諸藩士ノ如シ」という評価は鎌田自身の実体験から来る部分が大きいと言えるのではないだろうか。

そうすると、この『秩父暴動実記』は秩父事件に関する重要な史料とされているが、鎌田が「維新時代の諸藩士のようだ」と指摘する羽織袴の捉え方は、秩父困民党幹部の羽織袴の捉え方と一致するのであろうかという疑問点が考えられる。

また前掲史料中の小隊長・総理の羽織袴という衣服を、稲田雅洋氏は著書の中で、「かつての武士の戦う晴れ姿であり、戊辰期

の戦闘や士族反乱の際の服装に近いものだったのであろう。そしてその姿こそは、『身命ヲ抛ツテ』決起した彼らのまさにハレの日の姿であつたかもしれない。『羽織袴で二本差』とは農民にとって強者のイメージであり、長い間抑圧されてきた彼らの憧憬の姿であつたと分析している。しかし稲田氏の分析通りだとすれば、羽織袴という服装が、非日常の世界でもあり日常の抑圧から開放される場でもある一探の際に、その装いとして出てきても良いと思われるが、それを見ることができないという疑問が浮かび、さらに明治十年代の農民達が過去に見ていた羽織袴は武士だけのものであると限定することは難しく、むしろそれ以外の明治における羽織袴の着用までをも視野に入れて分析することが必要であると考ええる。

本稿では①秩父困民党で羽織袴、そのうち特に袴についての着用の実態を明らかにし、次に②秩父事件参加者が事件以前に見ていた羽織袴について考察し、さらに③その装いには何が意図されているのかを考察していくことにする。

一 秩父困民党幹部の袴の着用

① 袴に注目する理由

秩父事件において、二二歳の若き甲大隊長として常に最前線で活躍した新井周三郎は、尋問の中で「右間村出立ノ当時ノ拵ヘハ今一応承ラン」という検事補の質問に対し、「木綿袴二枚ヲ着重ネ、白木綿ノ鉢巻ト褌ヲ用ヒ長キ刀ヲ帯ヒタル迄ニテ、陣笠ヲ被リ袴ヲ着ケル等ノ事ハ曾テ致サザリシ」と答えている³⁾。

この尋問は明治一七年一月一日三日に行われた第一回目のものである。その時他の部分の尋問において、周三郎は自分は大隊長ではなく、やったはずの警官殺害・官署破壊・民家への放火なども知らないと答えている。しかし翌日の第二回目になると、検事補が副総理の加藤織平が東京で捕まり、周三郎と自分が指揮をとったと証言している事を突きつけたので、周三郎の証言も「昨日ハ何ニ思付ズシテ申立サリシガ、是ヨリ其实ヲ申立可シ」と述べた後は、蜂起以降の経過を詳しく述べ始める。したがって、第一回目の尋問というのは、周三郎が事実を隠そうという姿勢でぞんでいた尋問であつたと言える。

しかし、第一回目の尋問における証言は注目すべき事柄であると私は考える。

もちろん、当時の尋問調書は省略整理して書かれているものであるから、尋問の内容を正確に、全て再現しているわけではない。しかし周三郎が陣笠・袴の着用を否定しているところからすると、検事補が行った尋問の中に、省略されているのが陣笠・袴の着用を問うた一節があると考えるのが筋であろう。そうでなければ、その日の他の尋問に対しては知らぬ存ぜぬで通している周三郎が、わざわざ聞かれもしていない陣笠・袴について言及する点については説明がつかない。

このことは、検察が陣笠・袴を重要な目印と考えていた事の表れではないかと私は考える。

また、明治一七年二月二五日に埼玉県警察署が作成した「埼玉県秩父郡暴徒事件差押物件表」というものがある。それには刀

類・銃砲・槍・竹槍などといった武器類のほかに、襷・鉢巻・陣笠・衣類・袴が記されている⁽⁵⁾。私はこの中で、「衣類」と「袴」を別に記載しているところに、警察が袴を重要視していたことが表れており、新井周三郎の尋問から考えられる検察の袴に対する捉え方の裏付けとなるものと考ええる。

また、早い段階から秩父事件の前身となる負債に関する嘆願活動に加わっていた柳原正男の尋問において検事補は、「其方ハ槍ヲ提ケ袴ヲ穿チ居タル位ナレハモ頭ト尊フ筈」と言い、柳原が幹部の一人ではないかと迫っている。

この質問の裏には、当の検事補をはじめとする明治初期の人々の心の中にある、袴というものに対する「着ている人は偉い人」というイメージが示されているのではなからうか。

② 秩父困民党幹部達の服装

まず最初に、秩父困民党の幹部の服装について見ていくことにしたい。では幹部とは誰かということになるが、まず困民党総理の田代栄助が名前をあげた三四名が考えられる。ただし、名前をあげられた者の中には、病気のために不参加であった者、不起訴処分になった者、随行者として罰金のみが科せられた者も含まれており、全員が本当に幹部であったかに疑問が残るが、まずはその三四名について見ることにする。

最初に、鎌田冲太が『秩父暴動実記』で指摘した小隊長について見てみたい。ただしここでは、小隊長に加え、前線の指揮官でもある甲乙各大隊長、副大隊長についても併せて見ることにす

る。

まず、その名前をあげてみる。甲大隊長は新井周三郎、甲副大隊長は大野苗吉、乙大隊長は飯塚森蔵、乙副大隊長は落合寅市である。

小隊長はそれぞれ担当村落ごとに決められており、柴岡熊吉（大宮郷）、高岸善吉（上吉田村）、犬木寿作（飯田村・三山村）、村竹茂市（阿熊村・日野沢村）、坂本伊三郎（白久村・賛川村）、塩谷長吉（下影森村）、新井時蔵（蒔田村）、萩原勘次郎（三沢村）が各村落の小隊長である。

ただしこの一二名の中で、大野苗吉は一月四日夜の金屋における戦闘で死亡しており、裁判関係の記録は残っていない。

また、飯塚森蔵、落合寅市は逃亡に成功し、彼らについての尋問調書も残っていない。

以上の三名については史料的に不十分であるので、ここではそれ以外の九名について見ることにする。

この九名について見ていくと、彼ら自身の尋問調書・裁判言渡書の中に袴が出てくることは意外に少ない。わずかに、前出の新井周三郎にあるのみである。

ただし、実戦指揮官である隊長達が、一月一日に掠神社で配布され所有していた指揮旗については、九名中六名という高率で裁判記録に記述されている。旗の記載がないのは柴岡熊吉・塩谷長吉と新井時蔵の三名のみである。柴岡は会計長も兼ね、総理の田代栄助の側で活動しており、小隊長として最前線で指揮をとっていたとは言い難い。塩谷は随行者として罰金三円に、新井時蔵

は「暴徒ノ嘯集ニ応シ煽動シテ勢ヲ助ケ其情輕⁽⁷⁾」いと判断、情状酌量され、煽動者としては軽い重禁固二年に処されている。

一方、旗の記載されている幹部たちの中で、新井周三郎と高岸善吉は放火の罪に問われて死刑となっている。それ以外の者は、嘯集に應じ煽動して勢を助けたとしてそれぞれ輕懲役に処されている。(萩原勘次郎・八年、大木寿作・七年六ヶ月、村竹茂市・七年六ヶ月、坂本伊三郎・六年)。

以上のことをまとめると、暴徒嘯集に問われて輕懲役になった小隊長の裁判言渡書には旗の所有が明記されており、檢察・裁判所は指揮旗の所有の有無を実戦指揮官であるかどうかの判断材料として用いているが、袴の着用をその判断材料とはしていなかったということが言えると思う。

次に隊長以外の幹部で、尋問調書、裁判言渡書に袴を着用していた記述がある人物を見てみたい。

まず、総理の田代栄助である。田代は裁判の中で、「黒色の襦袢に白メリヤスの股引を穿き紺の羽織を着し白色のケットを纏⁽⁸⁾」っていたと証言している。この証言だけからすると、田代は袴ではなく股引をはいていたことになる。しかし、田代が一月一日の蜂起の前日に宿を借りた神官の宮川津盛が、栄助に一月一日朝に袴を渡しているという記録があり、さらには一月一日に因民軍に捕らわれた埼玉県土木課の千葉正規の上申書にも、田代の服装が白のケット、羽織袴であったとある。⁽⁹⁾

前出の田代栄助の証言は朝野新聞の公判傍聴記にあり、宮川津盛のものは宮川の裁判言渡書の一節にある。以上のことからする

と、裁判所は宮川津盛の裁判言渡しの時点においては、田代が袴を着用していたと判断したことになろう。

さらに、ここから考えると、困民党の中で会計長という重役に就いていた宮川津盛も袴を着用しているということが十分に考えられるのではないかと思う。宮川津盛は神官でもあるので、私用の袴はもとより、職業上所有している袴も一着のみではないであろう。

また、前出の埼玉県土木課の千葉正規は、参謀長の菊地貫平と、軍用金集方の井出為吉、三沢村小隊長の萩原勘次郎も羽織袴を着用していたと報告している。⁽¹⁰⁾

さらに石間村の久保平徳松の証言によると、副総理の加藤織平は「ジャッポウ冠リ其上ニ白ノ鉢巻ヲ為シ大小二本ノ刀ヲ差シ袴ヲ穿チ立揃絹ノ羽織」を着用し、同じ石間村出身で加藤の片腕として働く新井繁太郎は「白木綿ノ鉢巻ヲ為シ袴ヲ穿チ木綿ノ羽織」を着ていたとある。⁽¹¹⁾

しかし、尋問調書・裁判言渡書・公判傍聴記を見ていくと、一月一日の時点で袴を着用しているという記録は顯著に多いとは言えるものではない。前述の田代栄助が記憶していた三四名の幹部の内でも、着用が書かれている者が五名、他の者に袴を貸しているのが本人も着用していると考えられる者が二名、着用の目撃証言で着用がわかる者が四名の計十一名である。しかしそれ以外の者の中には、逃亡に成功しており記録が残っていない者が四名、免訴になっている者が一名、死亡している者が一名おり、袴の着用の記録がないのが残りの一七名ということになる。(別表

参照)

③ 田代栄助の記憶していない幹部達の服装

それでは次に、栄助の記憶する幹部以外の人の記録にも目を見てみることにする。

最初に、もとは富山の薬売りで、秩父地方においては代言人も行っていたという前歴があり、困民党では会計方の仕事をつとめていた木戸為三を見てみることにする。彼は蜂起の際の集合場所である棕神社に一度行ったが、「一時其寓居ニ婦リ所有之袴ヲ穿チ再ヒ該神社ニ立戻¹³」っている。木戸は「鉢巻タスキ類ノ物品渡シ方」を行っており、重禁固五年の刑を受けているので、幹部の仕事をしていたと考えて良いと私は考える。その木戸が一月一日の集合場所である棕神社に着いた時、袴をはいてはいなかった。ただ、木戸は袴を所有していたので、寝泊まりしている所に一旦はきに戻っている。

次に、袴が棕神社で配られている事例を見てみる。放火現場での指揮者であるとして、有期徒刑一五年を受けた上日野沢村の森川作蔵という人物がいる。彼も棕神社に到着した時に袴ははかずに脚半のみをはいていた。しかし棕神社への途中で、新井周三郎に従い警官追撃をしてその働きが認められたのか、棕神社において伝令使の門平惣平より「袴及指揮旗¹⁵」授けられ

秩父困民党幹部の袴の着用（河本）

ている。指揮旗は指揮官の目印であるということは一目瞭然であるが、それと対で袴が授けられているところに困民党幹部たちが考えていた袴のイメージがあらわれていると私は考える。これは、裁判において着目された各隊長たちの所持した指揮旗の見方

別表 秩父困民党幹部における袴の着用状況

袴の着用している者	袴の着用している者、自らも着用していると考えられる者	目撃証言により着用が判明する者	逃亡成功者	免訴者	不参加者	死亡者	袴の着用の記録のない者
田代栄助、新井周三郎、坂本伊三郎、横田周作、萩原勘次郎	宮川津盛、門平惣平	加藤織平、菊地貫平、新井繁太郎、井出為吉	井上伝蔵、飯塚森蔵、落合寅市、井上善作	泉田郁美	新井森蔵	大野苗吉	柴岡熊吉、高岸善吉、犬木寿作、村竹茂市、塩谷長吉、新井時蔵、宮川寅五郎、守岩次郎吉、門委庄右衛門、新井悌次郎、新井駒吉、小柏常次郎、坂本宗作、嶋田清三郎、高岸駅蔵、新井森蔵、堀口幸助

出典『秩父事件史料集成』一〜三巻、六巻

と通ずるものがあるのであろう。

さらに、幹部ではなく一般の参加者は袴をどう捉えていたのかを見てみる。

風布村出身であり、二日に同じ村の大野副次郎、苗吉らに狩り出された坂本儀右衛門は、尋問で大将は誰かという問いに対し、一月二、三日については「袴ヲ着小旗ヲ持居ルモノガ三人計リ居」たと答えている。また、秩父から群馬、長野へ抜けた一隊の大將については、「年齢ハ三十位ニテ髯ガアリ其外袴ヲ着シ小旗ヲ持居リタル者」がいたと証言している。

ここでは小旗と袴がセットで述べられており、それが指揮官の目印としてとらえられていると言えるのではなからうか。

また、検事補の「袴をはいているくらいであれば、人も頭と尊ぶはずだ」という前出の発言から、袴をはくということは一般庶民の普段着ではなく、当時の人なら誰が見ても一般困民党员ではなく指揮官に見える服装であったということもわかる。

さらに、困民軍最初の結集地である榛神社において袴を着用していない指揮官に対して袴をはくように指示し、袴を所持していない者にはその配布が行われているという事実がある。私はこれは指揮旗の配布と合わせて考えてみると、困民党幹部が蜂起の際の指揮系統を重視していたということのあらわれではないかと考える。

しかし、裁判関係記録にあまり記録されていないという事実もある。これは幹部が逃亡中に袴を変装のために捨てていることも考えられ、袴の着用を裏付けけるものが、新井周三郎や田代栄助の

例のように、当人の証言、目撃証言のみが頼りとなり証拠として裏付けにくいという面が考慮され、実戦指揮官の判断基準にはされなかったのではなからうか。一方で、前述したように指揮旗の所持が多くの記録にあらわれることから、これをもって指揮官と考えていたと言えるのではないか。

二 武州世直し一揆指導者たちのいでたち

秩父事件の一八年前に秩父盆地内を吹き抜けた武州世直し一揆は、秩父事件参加者のほとんどが過去の体験として持っている事件である。秩父困民党総理の田代栄助は尋問の中で、「自分ハ生来強ヲ挫キ弱ヲ扶クルヲ好ミ、貧弱ノ者便リ来ル時ハ附籍為致、其他人ノ困難ニ際シ中間ニ立チ仲裁等ヲ為スコト實ニ十八年間」と語っている。この言葉から考えると、田代栄助の人生を左右する何かが秩父事件の一八年前にあったと考えるのが素直な取り方であろう。秩父事件の一八年前というとちょうど武州世直し一揆の年にあたる。

この武州世直し一揆について見ていくことは、田代栄助のみならず、秩父事件参加者のほとんどの過去の体験を見ることにもなり、彼らの心理・意識をうかがう手がかりになることになるのではなからうか。

秩父盆地内での武州世直し一揆の動きを知ることができる史料には、「一揆騒動荒増見聞之写」⁽¹⁸⁾「賊民略記」⁽¹⁹⁾「秩父近辺打毀一件」⁽²⁰⁾「秩父領飢渴一揆」⁽²¹⁾などがある。しかし、これらを見てみても、一揆勢の着用した袴の記述はなく、頭取の詳しい装いの記録とし

ては、「金盥をかむり手に斧を持、或はまた窓かね鉄棒四つ子唐鍬杯を持⁽²⁶⁾」っていたというものがあるのみである。

武州世直し一揆のいでたちを考察した斎藤洋一氏の論考にも、「一揆指導者はそれぞれ色とりどりの鉢巻・たすきで身を固めており、その内の幾人かの指導者は真綿の被り物をしていた⁽²⁷⁾」という分析がなされており、ここにも袴の着用については出てこない。

以上の事から、武州世直し一揆においては袴は着用されていないと考えるのが妥当であろう。

しかし、江戸時代には一般庶民の羽織袴の着用が禁止されていたということがあるので、一揆参加者が羽織袴を所有していなかったことが考えられる。

また、一揆の震源地である上名栗村の一揆指導者の資産状況を見てみると、財産らしいものは殆どなく、新町宿で捕まった打毀しの参加者を見ても厄介者・他国の出稼人・下男といった者が多く、これから一揆の主体勢力が貧困層にあったことがわかる⁽²⁸⁾。このことからみて、一揆勢が、江戸時代においては農民階級の中では村役人層しか着用を許されていなかった羽織袴を制度的理由と経済上の理由により所有していなかったことが、その原因の一つだと私は考えている。しかし、打毀しの際に商店の物を一揆勢が略奪しており、その際に羽織袴の略奪も不可能ではなかったはずである。しかし、羽織袴が一揆勢の装いとして記録されていないということは、それが一揆において意味をなす装いではないということもあるのではなからうか。

秩父困民党幹部の袴の着用（河本）

次に、この武州世直し一揆と秩父事件の指導者を比べてみることにする。

秩父事件時には、白のケット（毛布）を羽織っている者（総理の田代栄助）、シャッポ（帽子）を被っている者（副総理加藤織平）、ラッコ帽子を被っている者（伝令使堀口幸助）がいる。シャッポは明治初期には羽織袴と合わせて着用するのは相当な紳士の着用の仕方であるとされた⁽²⁹⁾。また、ケットを羽織ることやラッコ帽子を和服と共に着用することは明治初期の流行であった⁽²⁷⁾。このことから、秩父事件の幹部の中には、当時の紳士然とした服装で蜂起に参加したり、文明開化を象徴するような流行の先端をゆく服装をした者がいたということになる。

このような服装はある程度資産的に余裕がなくては着ることは難しい。そうすると、同じ秩父盆地を舞台としていても、武州世直し一揆と秩父事件は指導者の服装が違い、しいてはその資産状況が違うと言うことができる。したがって、武州世直し一揆では指導者層までもが貧困層だったのに比べて、秩父事件においては指導者層には富裕層も加わっているということになり、それぞれの事件の性格も違ったものになっているのではないかと考えられる。

武州世直し一揆・秩父事件とともに行われていた村落丸ごと人足を駆り出すという人足駆り出しの仕方や、その集團構成員が身に付けた鉢巻・纏という目印という点からみると、古くからの「一揆」の流れを武州世直し一揆・秩父事件ともに受け継いでいると私は考えている。

しかし、一揆のいでたちは基本的には非日常的なあり方を象徴するものであった。江戸時代においては百姓一揆のいでたちは多くの場合糞等であった。これが幕末となり、一揆の参加主体が惣百姓一揆や越訴型一揆のような村落のほとんどの参加から、前述の武州世直し一揆のように貧困層が参加者のほとんどを占めるといったように変化してきても大きな変化は指摘されていない。

世直し一揆についてみると、慶応二年に起こった前出の武州世直し一揆、さらにはその直後におこった福島信達騒動においては鉢巻・襷がそのいでたちの主体となっている。この鉢巻・襷については、その採用について非日常性の意識、神とのつながりの強化、さらには神への変身の意味もあったと勝保鎮夫氏により指摘されている⁽²⁸⁾。

しかし、この観点から袴の着用をはじめとする困民党幹部の服装を見ると、どうしても一揆のいでたちに流れる非日常性・神との関係といった意味合いとのずれが見て取れる。当時流行していた服装に非日常性や変身願望的な願いが込められていたのであるうか。

次章では、主に困民党幹部が目印とした袴は、明治初期にはどのように民衆に意識されていたのかを見ていくことにする。

三 袴の明治における広がり方

一般庶民の袴の着用が解禁されたのは、明治四年八月一八日のことであった。その日の太政官日誌に「平民檔高袴羽織着用可爲勝手事⁽²⁹⁾」という記事がある。

しかし、羽織袴の着用はすぐには庶民には広まらなかった。このころの日本の男性庶民の服装は、ごく一般的には「唐棧か結城木綿など木綿ものの編か緋の長着に、小倉か博多の角帯で、羽織は大体外出用か、いわゆる旦那衆のもので一般性はな⁽³⁰⁾」いものであった。また袴は、「富裕な商人とか御用筋の町役人など、改まったところで（中略）袴も着用することがあった⁽³¹⁾」という程度しかはかれておらず、庶民にはあまり縁のない服装であったと言える。

ところが、明治一〇年九月一八日に「官吏通常礼服用ノ場合ハ、黒若シクハ紺色ノ上服（英語フロックコート）ヲ以テ換用スルヲ得ベシ。但判任以下ハ各庁長官ノ見込ミニヨリ、羽織袴ヲ以テ代用為致不苦候事。」という太政官通達が出て、判任官以下の下級官吏には羽織袴でも代用することが許され、さらに同年一月五日に一般男子の礼服も羽織袴と政府が決定通知する⁽³²⁾。

しかし内務省は、翌一一年三月二九日に「通常礼服の儀に付、明治十年十月五日付伺及指令置候儀も有之候得共、人民一般羽織袴を用ゆるも不苦儀と可相心得、此旨更に相達候事。」という通知を出している。

これらから、明治一〇年一月五日に羽織袴を一般男子の礼服にするという通知が出されたのにもかかわらず、翌年の三月二九日に再度同様の通知が出されていることがわかる。これは羽織袴の広がり方があまり芳しくなかったことを示しており、羽織袴が一般庶民の礼服として広がるのは、すぐというわけではなく、いくらかの時間を要したことを指し示している。

それでは秩父事件が起こった明治一七年の時点において、秩父地方では羽織袴はどれだけ普及していたのであろうか。それを秩父事件の際に盗難された衣服の盗難届から見てみたい。

秩父事件の約一ヶ月後に大宮郷で質屋・高利貸を営んでいた稲葉貞助から出された「質物被奪取品」という書類がある。これには事件の際に困民軍により奪い去られた質草が、その置き主、質代、質に入られた日と共に明記されている。この質草を見ていくということは、資産家ではない庶民の衣類の様子を見ることになるので、庶民にどれだけ羽織袴が広がっていたのかをみる材料になると思う。

奪われた合計一五五点の衣類の質草の中で、一番多いのが綿入れの二四四点である。後に小袖の一九点、単物の一四四点、羽織の一二点、帯の二二点、半纏の八八点、袴の七二点と続く。この中に、袴はない。

また、上影森村の原島藤蔵からは、袴四四点、綿入れ三三三点、羽織三三三点の質草が略奪されたという届け出がある。⁽³⁵⁾

このような限られた事例から判断することは少し危険かもしれないが、羽織は庶民の中に入ってきているが、羽織袴というセットの形ではないということが言えるのではなからうか。

次に質草ではない他の盗難届についても見ていきたい。これを地域的に見ると大宮郷・定峰村・横瀬村・大野原村・金崎村・下日野沢村・金沢村・野巻村・本野上村からなっている。合計四〇〇件の盗難届があり、盗難された衣類は計一三六六点にのぼる。内訳をみると、羽織・袴・綿入れ・半纏・単物・袴・股引・小袖・

帯・襦袢・下着・シャツ・胴着・ボウシ・ラッコボウシ・白ムク・毛布・頭巾・カラス・脚半・腹掛・腕拔・万筋・袴となっている。統計を取ってみると、①綿入れ（四二二点）②羽織（三三三点）③袴（二二点）④股引（一五五点）⑤帯（二二二点）⑥袴（二二点）⑦単物（一一二点）⑧小袖（一〇〇点）⑨脚半（八八点）⑩襦袢（八八点）という順番になっている。⁽³⁷⁾

この中に、袴がないわけではないが、第六位になっており、庶民のはきものである股引より下位である。

この統計から二点のことを言うことができる。

まず、困民党の略奪した衣類の分類から、そのほぼ半数が上に羽織ったと考えられる綿入れ・羽織・袴・単物・小袖（計一一七二点／一三六六点）で占められており、略奪の目的が主に防寒にあったということがうかがえるということである。

秩父事件が起こったのが一月である。一月の山村の夜となれば冷え込みもきついであろう。これについては、大野原村の斎藤千代蔵に向かって困民軍が衣類を略奪する際に言ったという「寒冷ニ付着物ヲ借用」するという言葉がそれを良く表している。

次に、秩父盆地の中に袴の所有がある程度の数あったということである。しかし、略奪品という面からみる限り、所有数が多いか少ないかは残念ながらわからないが、略奪数が圧倒的に少なく、事件参加者たちからは、略奪に際しては重視されていないということが言えるのではないだろうか。前出の質草に袴が見当たらないことと合わせて考えてみると、袴というものはまだ一般庶民には縁の遠いものと感じられていたということと言うことがで

きるのではなからうか。

四 袴の示すもの

明治一〇年代の秩父の人たちが見ていた羽織袴とは、江戸時代の武士、村役人の服装としてであり、前章で考察した明治になってからの下級官吏の礼服、そして人民の礼服としてひろまっていた羽織袴であると言える。

では次に、幹部は羽織袴をどのように意識していたのかという点について考えていくことにする。

軍用金集方でもあり、狩り出しにも大活躍した宮川寅五郎が大宮郷で「寒気ヲ凌カン為メ重右エ門宅ニ有合セタル羽織袴枚ヲ奪」⁽³⁸⁾ったという記録からもわかるように、秩父事件が起こったのは一月という初冬であるので防寒のために羽織を着用したことがわかる。

また、以上の史料からすると、幹部である宮川寅五郎は大宮郷まで羽織を着なかったと考えることが妥当な捉え方となる。

さらに、阿熊村・日野沢村小隊長の村竹茂市は一月一日の時点で、羽織ではなく半纏を着用していることも尋問調書からわかる⁽⁴⁰⁾。

また、棕神社において袴が配られた事実はあるが、羽織については配られた形跡がない。

以上の事からして、困民党幹部の中において、羽織袴の着用は、少なくとも羽織については着用が徹底されてはいないと言える。したがって羽織袴というセットとして意識されていなかった

と考えることが妥当ではないかと考える。ここから、明治になり、庶民に広まっていた羽織袴のセットとしての礼服という意識を持って、幹部達は袴もしくは羽織袴を着用し秩父事件に臨んではないかと考えることができるのではないだろうか。

それでは、何人もの幹部がしていた袴の着用にはどのような意味が含まれているのだろうか。私は、指揮系統上、一般困民党员と幹部を区別する必要から生まれたものだと考えている。

なぜなら、一般の参加者が蜂起の当日に着てきそうになく、比較的容易に調達できる物というところ、明治になって、改まった時にしか着用しない礼服の羽織袴が一番妥当ということになるのではないだろうか。

しかし羽織は、鎌田冲太が「暴徒ノ扮装ハ農人普通ノ時服乃チ筒袖股引草鞋」と記録しているように、秩父の庶民の冬の仕事着でもあり、蜂起参加者の多くが着用する筒袖と遠目では間違われやすいという欠点がある。

前出の盗難届の統計から見ると、綿入れが一位であり、羽織をも凌いでいる。これは、防寒には綿入れが最適であったという当時の秩父の農民の意識と、その広がりを見せていると言もえるのではない。また、遠目で羽織と間違われやすいということは、この綿入れも前述の筒袖とも相通じるところがある。そこで袴が幹部の目印になったのではないかと私は考える。

事件後に調べられた「埼玉県秩父郡暴徒事件差押物件表」の中に於いて、衣類と袴が分けて記載されている。そこには羽織の記載はなく、衣類に含まれていると考えられる。これは警察も袴の

みを重要衣類と考えていたと言いうことが出来るのではないだろうか。

おわりに

ここまで、秩父困民党幹部の服装について見てきた。そこから言えることは、困民党幹部達自身のもとへ羽織袴が広がっていくのは、明治政府が決めた下級官吏の礼服、さらには人民の礼服として、羽織袴をそれと決め通達を出している事実が大きなきっかけになっていると考えられる。

また、袴という服装を幹部の服装としたというところには、「一揆」の中に受け継がれてきた神とのつながりの意識という点については薄いと言わざるを得ないと私は考える。

では、何を目的として、困民党の幹部達は袴をそのいでたちとしたのであろうか。

私は、彼らが近代的な「組織」というものを意識したからではないかと考える。

秩父困民党では、幹部が袴を着用し、一目見て幹部とわかるようにしている。

さらに、幹部達は指揮旗を持っており、部隊の長であることを一目瞭然にしている。

そしてさらに、注目すべきは、その部隊編成である。甲隊・乙隊に別れ、さらに鉄砲隊・抜刀隊・竹槍隊といった部隊に分かれ、二列縦隊で小鹿野から大宮郷へ向かったことは知られている。

秩父困民党幹部の袴の着用（河本）

ここに、「組織」というものを意識し、行動しているということを見ることが出来る。その行動の中には、明治になってから入ってきた、徴兵制による軍隊の影響もあるのではないかとと思う。田代栄助が、捕らえた陸軍測量士の吉田耕作に「吾党ニハ軍事ニ訓練タル人物ニ乏シク差向キ先生ヲ推シテ総指揮役ニ置キ」というように、困民軍の指揮官への就任を依頼しているところからも、軍事行動を起こしていると自覚しているところが見える。

もちろん、世直し一揆が全くの無組織だということはないのだが、世直し一揆にはなかった「近代的な」組織の組み方が秩父困民党には意識されていたといえるのではなからうか。

また、秩父困民党が、「組織」を意識していたとすると、田代栄助らが、逃亡する際に山中に埋めた「軍備原案」「地方警備」の書類が、机上の空論ではなく、今ある組織を拡大したものとして考えられた現実味を帯びたものとして幹部の中では考えられていた、と考えることができるのではなからうか。

以上、袴の着用から秩父事件を考察してみたが、ここから言えることは、秩父事件とは、秩父の民衆が自分の見聞により、一揆の組織を「近代的」に発展させていった姿であり、政府が行った近代化を民衆自身が消化し、古くからの伝統とミックスさせたものと言えるのではないかと考えている。

註

- (1) 井上幸治・色川大吉・山田昭次編『秩父事件史料集成』(二)玄社、一九八四年) 第六巻、四九頁。以下、出典として

同書を記す場合には、巻数と頁数のみを記し、例えば、第六巻の四九頁の場合には、六一四九と略記することとする。

なお、本稿において史料を引用する場合には、旧漢字を現在の漢字に改め、適宜句読点を付し、異体字は正字に改めた。

(2) 稲田雅洋『日本近代社会成立期の民衆運動―困民党研究序説―』(筑摩書房、一九九〇年)二四五頁。

(3) 二一九六五。

(4) 二一九六九。

(5) 四一九四〇。

(6) 一一八三五。

(7) 二一六〇九。

(8) 六一九〇一。

(9) 二一五〇二。

(10) 四一九一八。

(11) 同右。

(12) 二一八一、一八二。

(13) 二一三四九。

(14) 二一三四二。

(15) 二一五〇一。

(16) 一一三六三。

(17) 一一三六四。

(18) 一一四六。

(19) 近世村落史研究会編『武州世直し一揆史料』(慶友社、

一九七一年)第一巻、一六〇―一七二頁。

(20) 同右、一七一―一七八頁。

(21) 『秩父市誌』(同編纂会、一九六二年)四四六―四四九頁。

(22) 『日本思想史体系58民衆運動の思想』(岩波書店、一九七〇年)二八八―三〇六頁。

(23) 註(19)所収「一揆騒動荒増見聞之写」一六六頁。

(24) 斎藤洋一「武州世直し一揆の考察(続)―一揆勢の『いでたち』をめぐる―」一七頁、近世村落史研究会『近世史叢』二(一九七七年)所収。

(25) 森田雄一「武州一揆」六三―六四頁、埼玉県自治研究会『埼玉自治』三三二(一九七八年)所収。

(26) 『郵便報知新聞』明治七年九月の記事に、紳士の服装として「白地の上布、スキヤの羽織に五仙の袴、シャツポ、手に水牛の細柄のこうもり傘」とある。昭和女子大学被服学研究所編『近代日本服装史』(近代文化研究所、一九七一年)三三頁。

(27) ケットについては、鷹司綸子『新版服装文化史』(朝倉書店、一九九一年)八〇頁。ラッコの帽子については、前掲『近代日本服装史』一二頁。

(28) 勝俣鎮夫『一揆』(岩波書店、一九八二年)一〇四―一三三頁。拙稿「秩父事件における白鉢巻袴の着用に関する考察」『法政史学』第五一号、一九九九年三月)参照。

(29) 石井良助編『太政官日誌』(平文社、一九八一年)第五

卷、三一八頁。

(30) 註(26)『近代日本服装史』一三頁。

(31) 同右。

(32) 中山泰昌編著『新聞集成明治編年史』(財政經濟学会、

一九三四年)第三卷、二九七頁。

(33) 同右、三七四頁。

(34) 同右。

(35) 四一六九一—六九八より作成。

(36) 同右、七〇〇頁。

(37) 註(1)『秩父事件史料集成』第四卷より作成。

(38) 四一六三七。

(39) 二一二五八。

(40) 二一五〇四。

(41) 六一四九。

(42) 四一九四〇。

(43) 四一九六四。

(44) 一一五一—五二。

〔軍備原案〕

一 総監督 一 国一名

一 副監督 一 名

属官 五名

一 隊長 一名

一 副隊長 五名

隊長副隊長ト共ニ二百名ノ兵士ヲ監督スルモ

ノトス

一 少佐 四名

兵士五拾名ヲ総フル者トス

一 聯長

十名ニ一名ヲ置キ兵士ヲ督サシム

〔地方警備〕

一 地方総部 一 国一名

一 郡長 一 国一名

属官 二拾名

一 村長

但是迄県庁ノ整理シアル村々又ハ聯合町村役

場ニ一名宛ヲ置キ属官各五名ヲ附スル者トス

一 警視官 一 郡五名

属官

但郡ノ大小ニ依リ本官属官ヲ増減スルコトア

ルヘシ

この書類は逃亡の際に山中に埋めたが、同行の島田清三

郎、犬木寿作が逮捕後に書類のことを供述し、島田の取調べ

にあたつた検事補が臨検し発掘したものである。